

「雨蛙」と「真心」(フロロベール)

須藤松雄

大正十二年(一九二三)二月ごろ、志賀直哉(三十一歳一敷年)は、「雨蛙」(あまがえる)を書きはじめた。同じころ、フロロベール(G. Flaubert 1821-1880)晩年の作「Un Goeur Simple」の中村星湖訳「真心」(まごころ)を読み、感服して「神品」と評し、自分の「雨蛙」も、よく行けば神品の域に達しそうだと思奮して筆を進めたが、三月初旬、京都に移転してからは気が乗らず、十二月、やっと書き上げたが、みずから失敗作と認め、神品云云もだめになったと言うに至った。何とも激しい上下動であって、こんな事は、この作者の長い創作生活でもめずらしい。事態のあらまは、旧著「志賀直哉―その自然の展開―」(昭和六十年、明治書院)に述べておいたが、これは一体どういう事だ

ったのか。メスの入れ方によっては、志賀文学の実体が、フロロベール文学との比較において、多少は見えて来そうだが、それには、志賀直哉全集、フロロベール全集(文体なども問題にする以上、当然フランス語の全集)を消化しているだけの素養が必要で、わたしには夢のまた夢、どうやら読んだものは、フロロベール作の幾篇かにすぎない。「雨蛙」「真心」をめぐる問題の考察を多少進めたいのだが、これでは所感の一端を記すだけの事しかできない。

山田九朗氏訳「まごころ」(築摩書房「フロロベール全集」4所収)を、ブレイヤード文庫のフロロベール作品集II所収の原文と並べて読んで痛感した。生きているうちにこの作

品を読んで、ほんとうによかったと痛感した。この作品についてフロロベールは次のように語る(一八七六年六月十九日付、デ・ジュネット夫人あて書簡——山田九朗氏「『三つの物語』解説」―「フロロベール全集」4―から引用)。

「素朴な女の物語は、信心深く、しかもこれに凝り固まったほうではあるが、ただ人のためにはまごころをつくし、できたてのパンのように心柔らかな、一人の可哀そうな田舎娘の世にはしられぬ生涯の物語です。はじめ一人の男を愛し、それからつぎつぎと自分の女主人の子供達、それから甥、一人の老人、その世話、ついでは自分のもらいうけた鸚鵡を愛し、その鸚鵡が死ぬと、これを剝製にさせ、こんどは自分が死ぬとになると、そ

それを聖霊と思ひこんで死んでゆく。これにはあなたが思うような少しの皮肉もありません、それどころか、どこまでも真面目なとても悲しい物語なのです。」

簡潔、鮮麗、事物が不思議なほど確かに存在する描写。わたくしに文体の美がわかるはずもないが、磨き上げた大理石柱のような美しさは、おぼろげに感じられる。女主人公、

フェリシテ (Félicité) の愚直で悲惨な生涯からは、素朴な愛情が尽きることなく放射され、おのずから聖女を感じさせるこの田舎女の生涯を、冷厳な、それでいて底深い熱を感じさせるフローベールの目が追求して描き切る。志賀直哉が「神品」と讃嘆したのも、このような「真心」の姿であろう。

「志賀直哉全集」(岩波書店刊、大版の全集)第九巻所収「未定稿Ⅷ」は、大正十四年二月、三月ごろの筆らしい(同巻「後記」)。「雨蛙」を書いてから約二年後の文。この段階の志賀直哉における芸術の最高目標を簡潔に示している。「…自分ならば、今の所何所までもリアリズムのもので、しかもショウウチョウウ的(須藤注。象徴的)に人をたかめ、人のより高いものゝ目標を示すものとならねばならぬ、

それこそ何所までもリアリズムで刻み上げられ、素朴な愛情を尽きるころなく放射して、おのずから聖なるものの象徴の面影を宿して人の心を高めるフェリシテの姿。「未定稿Ⅷ」が、芸術の最高目標としたものは、「真心」から受けた感動を主たる源としているように思われる。

ところで志賀直哉は、次のように語る。

「雨蛙」の主人公二人を自分は讚美してはゐない。二人は善良である、然し弱者であつて賢くない、」(全集第八巻所収「手帳4」64ページ下)

妻が過ちを犯し、夫には却つて妻への愛憐の情が湧く。そのあたりを「ソフト・フォーカス」に書きたかつた」のだが、うまく行かなかつたと言ひ(「雨蛙」に就いて)——全集同巻——、また、「…無道德は無邪気である。あの女主人公が無道德であればこそ一種の美しさを持つてゐるのだ。そして無道德であればこそ男主人公にも道德的判断が先に立つて来ないのである。赦ゆるせるのである。…」(同)とも言つた。

チェーホフは、志賀直哉の愛読したもので

しい。人間の醜さ、愚かさ、弱さを描くのに優しさの限りを尽くし、「チェーホフが此世に生れなければ吾々は知らず了ふかも知れないといふやうな美しさ」(「チェーホフ著作集」推薦)——「志賀直哉全集」第八巻——を結晶した。そこでは、人間の哀れな姿が、読む者の心を慰め清め高めるような陰影を帯び、その根は、チェーホフの深い絶望に達しているようだ。「雨蛙」の「主人公二人」(「手帳4」)とは、かなり違ふようである。

「真心」では、次から次に人が死ぬ。フェリシテの父についての叙述は、たったの一行(二)。「父親は左官で、足場から落ちて死んだ。」(“Son père, un maçon, se fait tue tombant d’un échafaudage”) 何とも的確で凄い。「真心」の基底の虚無が顔を出した。

以上のすべてにもかかわらず、「城の崎にて」「焚火」などは、世界文学の「神品」であらう。その事をわたくしは疑わない。

(一九九一・九・二〇)